

読売歌壇

小池 光選

自転車で転びしことは手に告げず今宵はやばや
眼のつくり 横浜市 芳垣 光勇

【評】自転車で転倒してしまっただ。さいわい
怪我はなかったが、あぶないところだった。
子供たちには言わない。心配されるだけだか
ら。老いたる者は、ただ黙って早く寝る。
姉さんがジェームス・ティーンをまだ語る八十
歳の目を輝かせ 大和郡山形市 四方 護

【評】今のごときは忘れても、むかしの記憶
は鮮明である。青春の日の、かの銀幕のジェ
ームス・ティーン、生き生き語る姉は八十歳。
ああ人生は奥が深いなあ。
視力衰えかすみし文字をむさぼりぬ赤子が乳を
欲しがるように 町田市 城所レイ子

【評】これも老いの歌。新聞や本を読むこと
が大嫌になってきた。それでも読む。必死に
読む。赤子が乳を求めるときに。比喩がよい。
散り際に見せる思わぬ美しさ祖母の死に願に命
輝く 山形市 長岡 正昭

「ママに居るのは棄てられたからか」と問ふ母は
今日も施設に我を待ちをり 東京都 鈴木真理子
その人と思えばわれのその頃が思い出される賃
状書きつつ 芦屋市 中島富美子
八十を過ぎてても年賀状を書く麻痺の残れる右手
はげまし 松山市 三木須磨夫

「年相応」医師に告げらるるさびしさ雪の匂う
を知らずに過る 仙台市 植沢 悦子
向こうまで三分間の船旅だ渡しの船に今日もゆ
られて 鳴門市 楠井 花乃
あと四年生きまじょうよと妻菜ふワールドカッ
プは薬より効く 四街道市 須崎 輝男

栗木 京子選

子どもたちに夢あたへむと灯を点すキーウの地
下のクリスマスツリー 鹿嶋市 岩熊 啓子

【評】戦禍の続くウクライナの首都キーウ。
爆撃を避けて地下に飾られたクリスマスツリー
をテレビで観た。電力不足で控え目な光だ
ったが子供たちに夢を贈ったと信じたい。
森賢主の書きし「戦」の字しただりて思ふ戦場
に流るるものを 酒田市 村上 秀夫

【評】二〇二二年の今年の漢字は「戦」。京
都の清水寺賢主の筆からしたたる墨は、戦場
に流れる涙や汗や血、そして形を持たないさ
まざまな感情を思わせる。臨場感溢れる歌。
手帳二冊携えている師走の日初めて記す病院予
約 東京都 山本 由美

【評】師走には今年と来年の二冊の手帳を持
ち歩く。新しい年の手帳にまず記したのは診
療予約だった。快癒の年になりますように。
あこがれの都会に住みて四十年たな家に居て花
を育てる 横浜市 伊藤 美耶

つい愚痴をこぼしたラインの三日後に言葉に替
へてシヨコラが届く 奈良県 藤本 京子
生来の好き嫌い無しのアライドを葉っぱ一枚で
崩ししパクチー 匝瑳市 川口由美子
歩道橋をスキップで降りる女の子夕陽に眺める
靴のうさぎ 東京都 平山 すみ
やや黒き八分に揚きしうどん煮る星影さゆる寒
の夕べよ 町田市 小堀 正伸

親子孫三年振りの焼肉は焼くも配るも孫が働く
水書後耳遠くなりケータイも電話も持たず時止
まりたり 東京都 津田 鉄三
倉敷市 藪木 重信

俵 万智選

あんなヤツどごがいのと聞かれたらほくろの
位置が好みと言おう 入間市 大野 美波

【評】つまりハナから、どごがいののが答え
るつもりはない。もしかしたら、本人にもわ
からないのかも知れない。なぜなら、まさにそ
れが恋だから。目に見えるほくろという具体
が、相手を燃らせることだろう。それも痛快。
裂けてから初めて気づく天辺に切り込みを持つ
ハートの形 さいたま市 樋口 直子

【評】ハートのあのかほは、裂けるための
切り込みだったとは。そんな切ない見立てが、
心破れた悲しさと響きあう。
ナチュラルで邪魔にならないデザインと勧めら
れ買う父の仏壇 横浜市 佐藤 水魚

【評】仏壇でない商品なら、確かにセールのスポ
イントだ。悪気はないと感じたから買ったの
だろうが、ひっかかる気持ちも伝わって来る。
「哀悼」を「会いたい」と打ち間違えた いや
間違えてなんかなかった 豊中市 葉村 直
能面は裏から見ると器なり演者はそこに顔を満
たせり 宮崎市 長友 聖次

不確かな余生をふたり持ち寄って明かりの色で
もめたりしたい 神戸市 若杉 有紀
便箋のくせ字のひとつひとつから解凍されるき
みの肉声 上尾市 関根 裕治
終電の窓に映った五年後のほくろは、こぼれはな
ると眠む さいたま市 雨雨雨 汰
余ってる画紙で誰が作ったか北斗七星緑の壁に
空高くビル街となる生家跡ここで家族は星を見
ていた 東京都 新美善代男

故郷は線路ひとつも無いけれど日の出日の入る
海があります 京都市 足立 紀子

【評】東にも西にも海があるというわけで、
作者の故郷はどこの島かもしれない。鉄道
も無い小さな故郷だが、自慢の海の光景が今
も目の底に焼き付いているのでしょうか。
ああああと文字の歎声流れてくるゴールなるらむ
夜中の孤独 立川市 市川 純

【評】深夜にトキメキを眺めていたら急に
絶叫した投稿が湧いた。サッカーのワール
ドカップで日本チームがゴールを決めたの
だ。熱狂する大勢と、流行りに乗れない自分。醒
めた己の孤独を、巧みな省略で描いた歌です。
大玉の霰は地上でぼんぼんと跳ねて踊って大雪
を呼ぶ 富山市 政橋 昭子

【評】大雪の気配を霧に察知する。眺め回
る感じの「ぼんぼん」の擬態語がいいです。
戦いの無意味なることを知りつくす原爆つけし民
なる言は 上田市 小山 渥子
出勤日は朝晩雪かき休日雪おろしと言う雪国
の友 平塚市 原 道雄

河口より迷ひ込みたるゆりかもめホテルの窓の
ガラスをのぞく 岩手県 千葉 蘇一
流星くるとふたたびみたび誘ひくれし兄の星を
ば今夜さがさむ 宇都宮市 阿久津登美江
使ひ捨てカイロで寒さ浸きを老いてひとりの
クリスマススイブ 足利市 熊田 敏夫
株下がり物価は上がる年末に我ら庶民は如何に
せんとな 泉佐野市 向井克之介

わが胸にからだ委ねて寝る。もも。老犬にし
て盲目なるを 栃木市 小林 朔美

◆投稿規定◆ はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名(ふりがな)、電話番号を明記。◆他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、日本郵便局留、読売歌(俳)壇、〇〇先生(希望選者名)係または読売新聞オンライン ◆毎週月曜日に掲載 右の影絵はほしさがき